

近代文学研究叢書

第六十六卷

昭和女子大学

近代文化研究所

近代文学研究叢書

第六十六卷

平成4年10月7日 初版印刷発行

定価 8,000 円 (本体 7,767 円)

著者	発行者	印刷所	発行所
昭和女子大学近代文学研究室	外山滋比古	大文堂印刷株式会社	昭和女子大学近代文化研究所 東京都世田谷区太子堂一丁目七番 電話 03 (三四一一) 五一二九番 振替口座東京四一七〇八六七

ISBN 4-7862-0066-2 C3091 P8000E

目次

口 絵	二
『近代文学研究叢書』の成立	二
凡 例	五
福田 夕 咲	七
笹川 臨 風	九
中村武羅夫	一〇一
佐藤 紅 緑	一三一
姉崎 嘲 風	四九五
PROFILES	六三八
卷末付記	六五五
第六十五卷年表補遺	六八八
索引	六九三

『近代文学研究叢書』の成立

『近代文学研究叢書』は昭和三十一年一月、昭和女子大学光葉会からその第一巻が発行された。以来、明治期全十二冊、大正期全十三冊、昭和期が本巻を加えて四十一冊を刊行、続刊中である。

本叢書は、創立者人見圓吉（東明）が建学の精神に基づき優れた研究者の養成を目的とし、これによって文学日本の近代相がいささかでも究明出来ればという強い願望により創められたもので、本学学生による近世の国文学者、洋学者についての研究調査をまとめた『文学遺跡巡礼』（昭和十三年十月、第一輯発行）が母胎となっている。

昭和二十年、戦争も末期に近づいた四月の大空襲により、本学は校舎とともに蔵書と未発表原稿の一切を焼失した。青年時代、三木露風、野口雨情らとともに早稲田詩社をおこして活躍したかつての詩人東明は、この時から明治の詩書をはじめ近代文学関係の文学書の蒐集にとりかかり、現在の近代文庫の基礎が固められた。神田の古書展では「文学書の値をつり上げる」という評判が立つほどの蒐集ぶりであり、こうして蒐められた典籍をもとに近代の文学者、思想家約八百名の伝記、業績に関する資料文献の龐大なカードの作成には日本文学科の学生が総動員され、『近代文学研究叢書』の基礎的資料の基盤が築かれたのである。なお、母胎となった『文学遺跡巡礼』はその名の示す通り、生涯と業績に加えて遺跡の实地踏査、遺族の訪問記を特色としたが、本叢

書はこの特色をそのまま踏襲している。すなわち、文学者の遺族を訪ね墓所や遺跡を踏査することによって、業績を含めたその全体像を闡明しようとするものである。また、著作と資料に関する年表調査も平行的になされ、網羅的な資料蒐集に意を注いでいる。業績については各専門分野における学界の権威に指導を仰ぎ、特に、発足当時の基礎固めには月曜会（学内における近代文学の研究）での研鑽が大きな支えとなった。

第一巻では明治三年二月歿のB・J・ベッテルハイム、八田知紀、S・R・ブラウン、J・R・ブラック、成島柳北、森有礼、新島襄、佐佐木弘綱、中村正直ら九名が収められ、以後歿年順に収録された文学者、思想家はこれまでに三百余名を数え、本巻を以て通巻六十六冊に及んでいる。その間、第六巻発刊の昭和三十三年に本叢書は菊池寛賞を受賞している。

なお、創刊当初から監修者として叢書の全般にわたりご指導、ご助言をいただいた方ですでに物故された諸先生を左に記して感謝の意を表したい。

秋庭 太郎（演劇学）	池田 亀鑑（国文学）	石田 吉貞（国文学）
上井 磯吉（英文学）	太田 三郎（比較文学）	荻原井泉水（俳文学）
片桐 顯智（和歌文学）	金子 健二（英文学）	金子 武雄（国文学）
河鱈 実英（歴史学）	木俣 修（和歌文学）	木村 毅（比較文学）
斎藤 一寛（仏文学）	坂本由五郎（英文学）	佐々木八郎（国文学）

笹沢 美明 (独文学)	佐藤 幹二 (国文学)	山宮 允 (英文学)
玉井 幸助 (国文学)	辻村 鑑 (英文学)	内藤 濯 (仏文学)
成瀬 正勝 (近代文学)	能勢 頼賢 (国語学)	浜 徳太郎 (美学)
人見 圓吉 (近代文学)	本間 久雄 (近代文学)	宮内 秀雄 (英語学)
矢野 峰人 (英文学)	吉田 澄夫 (国語学)	

本卷には、詩人福田夕咲 (明治十九年三月十二日～昭和二十三年四月二十六日)、歴史家、評論家、俳人笹川臨風 (明治三年八月七日～昭和二十四年四月十三日)、作家、評論家中村武羅夫 (明治十九年十月四日～昭和二十四年五月十三日)、小説家、劇作家、俳人佐藤紅緑 (明治七年七月六日～昭和二十四年六月三日)、宗教学者、評論家姉崎嘲風 (明治六年七月二十五日～昭和二十四年七月二十三日) の五名の研究調査を収めた。

凡 例

一 著作年表は、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを収め、資料年表は、第三者の考説、評論、感想等の文献を収めた。単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げ筆名、筆者名は掲載誌紙の表記にしたがった。

二年表記載で、調査者が直接あたれなかった項目については☆印を付した。

三 各稿の末尾に「採訪」と「参考文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表し、また、資料の出所、起稿や修訂にあたって参考にした文献の依拠を明らかにするためのもので、「参考文献」は資料年表と一部重複することがある。

四 表記はすべて現代仮名遣い、常用漢字を用いた。但し、人名は、各研究対象者に限り旧漢字で表記した。

五 引用文の表記は仮名遣いは原文にしたがい漢字は常用漢字を用いた。外国文の場合は訳文または大意を添付する。なお原文中の誤りや疑わしい箇所は右側に（ママ）と記した。

六 年代は日本年号と西暦とで適宜表記し、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を用いた。

福ふく

田だ

夕ゆう

咲さく

昭和
二十
三年
（一
九四
八）
三月
四月
二十六
日生

イ 幼少年時代

福田夕咲（本名有作）は、明治十九年（一八八六）三月十二日、岐阜県高山町（現高山市）大新町一丁目九十八番地に、福田吉郎兵衛（敦雄より改名）、象きまの四男として生まれた。九人兄弟の末弟であったが、彼が生まれたときには、富喜、秋作、貞、依の四人はすでに夭折しており、長男耕作、長女たを、次女かど、三男東作ら兄弟があった。

福田家は、その一族から本居宣長の高弟田中大秀の門人や茶人などを数多く輩出した名門であった。その先代たちの遺業については、滝井孝作による「福田家の人達」（新潮 昭43・8）に詳しい。福田家のもと呉服屋であったが、明治八年の高山の大火によって焼失した後、舶来の品を扱うようになり、高山の文明開化の先駆けとなった。代々その当主が吉郎兵衛を名乗るしきたりで、夕咲の父、すなわち六代目吉郎兵衛は、高山伊鯖青物市場を開いて商業の革新に務め、また町村の自治にも大きく貢献した。歴代当主と同じように詩や茶道を学び、雅楽や俳諧を楽しむ風流人でもあった。母象は、国府宇津江の豪農杉下太郎右衛門の末女で、彼女もまた夫と同じように茶や俳句を嗜んだ。幼い頃の夕咲は、野や川で自然と親しみ、冬になれば「圧しつけるやうな沈黙

に脅えながら」(「子が生ひ立ちの記」読売新聞 大3・6・15) 炬燵で給双六や歌留多に興じ、出入りの衆の噂話に耳を傾け、『時代加賀見』や『根診察』などの草双子を眺めて暮らしたという。

明治二十四年四月に高山町立の飛騨男子尋常小学校に入学。翌二十五年九月には、父の六代目吉郎兵衛が五十三歳という若さで他界したため、長兄の耕作(号鶴雲)が七代目を襲名、父が興して間もない丸福新市場の経営業務を引き継いだ。彼はのちに町会、郡会、県会などの議員を歴任し、大正元年から九年にかけては高山町の町長も務めた人物で、文芸の嗜みも深く、彼の庇護を受けた滝井孝作は「鋤雲は当時、高山の旦那衆俳諧の伝統の厚い壁を突破して、身分年齢の格段のちがひもかまはずに、私共にわけへだてなく俳友として交はった、進取の人だ。」(福田家の人達)と書き記している。その長兄を親代わりとして何不自由なく成長した夕咲は、明治三十年四月、岐阜県立斐太中学校(現、斐太高等学校)に入学。文学好きの少年で、卒業までに、江戸時代の古典をほとんど読破したという。

口 東京時代

明治三十七年三月、斐太中学校を卒業した夕咲は、その年の八月、早稲田大学文学部予科英文科に入学した。二年後の三十九年暮れに「読売新聞」に応募した新体詩「新春」が入選となり、翌年一月一日の紙上に掲載されたのが文学活動の第一歩であった。同じく四十年六月には、「文庫」誌上に「幻」「紅き灯青き灯」「まろき石」を処女作として発表、その後も継続して同誌に詩を発表し続けた。これより少し早く、四十年三月に

は、島村抱月の提唱による新詩の創造を目指して、相馬御風、人見東明（台吉）、加藤介春、三木露風、野口雨情らが早稲田詩社を結成、自然主義詩の抬頭を計るが、彼らは「早稲田文学」や「文庫」を主な発表の場としており、夕咲を含むこれら「文庫」同人は、同じく四十年十月、黒潮会という詩文研究会を作り、人見東明宅で会合を開いた。「黒潮会第一小集記事」（水島 文庫 40・11）によれば、当日の参会者は、夕咲、御風、介春、露風、三富朽葉らであった。この会は四十一年六月の第五回まで続き、夕咲の「文庫」執筆も同月までで終わった。彼は早稲田詩社の創立当時の同人ではなかったが、四十一年二月の「文庫」誌上に於ける『「有明集」合評』に参加、同年三月の「疑惑」から「早稲田文学」に詩を掲載し始め、折から詩社を退くことになった露風に代わってこれに参加した。この頃の夕咲について土岐善麿は「どちらかというと、つつましかな存在で、あまり議論などをする方ではなかった。」（「四十年の昔」飛騨短歌 昭23・8）と回想している。

明治四十二年三月、早稲田大学を卒業。四月に読売新聞社に入社した東明に少し遅れて文芸部に籍を置くこととなった。記者としての仕事の傍ら、同年五月、東明、朽葉、介春、今井白楊、山村暮鳥らとともに、現代口話による自由形式の詩の創造を目指して、新たに自由詩社を結成、機関誌「自然と印象」を創刊した。その第一号には「編輯兼発行人 福田夕咲」の記載があり、住所は、東京市小石川区（現、東京都文京区）小日向台町一丁目四十八番地となっている。創刊号に掲載された夕咲の詩は、「月光と少女」という総題のもとに書かれた「灰白」「ツワイライト」など六篇であった。夕咲を含め同人たちの詩材は、人間の醜悪さや暴力、暗鬱な官能性に求められたが、四十三年二月発行の「自然と印象」第九集は、東明の「酒場」のあまりにも赤裸々な

表現のために新体詩としては初めての発売禁止処分を受けることとなった。この号に掲載された夕咲の詩は「春の午後」「女学院跡の黄昏」など三篇であった。

また、四十三年四月には、岩野泡鳴を主筆として蒲原有明、小山内薫らによって「世界文芸」が創刊されると、夕咲はただちに編集の任を引き受け、第一号に『春』と『恋』とを発表した。しかしこの「世界文芸」も、七月号掲載の神崎沈鐘の小説「親と子」が、風俗壊乱の罪に問われて発売禁止となり、やがて「新文林」の編集部を合併したものの、間もなく廃刊に至った。一方自由詩社も、すでに六月には解体し、「自然と印象」も第十一集をもって廃刊となった。

これに代わって十月には清浦青鳥（東明）、楠山正雄、秋田雨雀らとともに、「劇と詩」を創刊、大正三年までは同誌が彼の主な活躍の舞台となった。また一方、「読売新聞」紙上にもぼつぼつと詩や随筆を発表するようになり、とくに明治四十四年一月十九日から八月二十九日まで断続的に執筆した「最近の詩壇」と題する評論は好評で「こゝ二、三年来、詩のことを論じた人の中で、詩壇の内面に流れつゝある潮流を正しく見得人として氏の『最近の詩壇』（本紙五面）には、多少の権威がある由来詩壇の事といへば白眼視し、冷笑して行うとする人さへ少なくない中に氏の感想には真面目さがあつた。」（青鳥「文芸週間叢報」読売新聞 明44・9・3）と仲間内にも評価された。この頃彼は、二年ほど長唄と常磐津を習い、以後多く執筆することになる俗謡詩の流麗なリズムや日本の詩情の基礎を養った。四十五年一月には、処女詩集『春のゆめ』を出版して好評であった。また同じ月に、「読売新聞」の「新年附録募集」欄で長詩の選者を務めた。同じく三月には、かねてからの懸案で

あつた劇と詩友の会の設立が具体化し、雜司ヶ谷において第一回目の会合が開かれた。この日参集したのは、夕咲、東明をはじめ、白鳥省吾、相馬御風、窪田空穂ら三十一名であつた。

大正二年六月には、兄の福田ひだ丸（東作）とともに、和綴の趣味本「蝙蝠」を発刊し、七月には抱月を代表とする芸術座の評議員の一人となつた。同七月、「憲政新聞」が創刊され、「読売新聞」の政治部長であつた田村逆水が、移籍して社会部長になつたのを機に、夕咲も「読売新聞」を退き、彼自身の言葉によれば「友誼の上からと、また一つには私自身の差し迫つた都合とで」（『紅箋緑箋』福田夕咲全集 昭44・3）「憲政新聞」に移つた。しかし、文芸欄と第一面の編集を担当することになつたものの長統きはせず、十二月には同僚の仲木貞一とともに「社の方針と意見を異にして、またも袖を連ねて憲政の編輯局を蹴って去」（『紅箋緑箋』）ることとなつた。しかしこの言葉の強気とは裏腹に、「福田夕咲はこの頃しばらく病氣にかかる。肉体的にも精神的にももつと強く生きて来ることを希望する。」（『雜錄』創造 大2・12）との記事がある。一方同じ年の九月、沈滞氣味だつた「劇と詩」は新生面の開拓を目指して「創造」と改題された。

八 高山時代

一方、福田家の家督を相続した長兄の耕作、七代目吉郎兵衛は、河東碧梧桐に俳句を学び、漢詩や短歌もよくする風流人で、魚市場のほかに彼の代になつてから春慶塗漆器と飛騨一位細工の製造販売店を興すなど商才にも長け、また歴代の当主と同様に政治的手腕にも優れた人物であつたが、彼には子供がなかつた。大正三年

五月、彼は末弟の夕咲を養子とし、福田家の跡取りにするために実家に呼び戻した。「よみうり抄」(読売新聞 大正七年五月)には、五月中旬には帰京予定との消息記事があることから、夕咲本人にとっては一時的な帰省のつもりだったのかもしれない。しかし、彼は以後再び上京することはなかった。

帰郷の少し前の三月、夕咲は兄吉郎兵衛とともに郷土誌「ツチグモ」を高山で創刊したが、はからずもこれが、郷里における文学活動の第一歩となった。この雑誌は滝井孝作が大阪、東京で編集を手掛け、大正六年に二十一号で廃刊となった。また翌四年からは「高山タイムス」に数多くのエッセイを執筆するようになった。さらに五年一月には「飛騨日報」を創刊して、短歌の選者を務め、自詠の歌や詩を掲載した。

また彼は、大正三年の秋、吉城郡丹津町の牛丸延太郎の長女実子と結婚、福田家では若夫婦のために三階を増築したが、しかし不幸なことにこの結婚は間もなく解消された。夕咲の側にまだその決意がなかったことが原因と見られる。それから約二年後の大正六年二月、益田郡金山の佐古庄次郎の長女恒子との再婚によって夕咲はようやく生活に落ち着きを得た。この年の八月、かつての詩友、三富朽葉と今井白楊が、房州で高波にさらわれて急死したと言う悲報が高山にもたらされた。その時の衝撃を夕咲は「もう今迄の平安な気分はすっかり減茶／＼になつて、胸も頭もこの悲痛な出来事で一ぱいになつてゐるのです。あまりの驚愕に涙さへ出ません。」(悲しき思出「三富義臣君今井国三君追悼録」大正六年六月)と語った。

福田 夕咲
大正七年五月には、吉郎兵衛とともに歌誌「クラジシ」を創刊し、八月には、現在の飛騨短歌会の前身とも言うべき山百合詩社を、山田白馬、黒内桃月らと結成して、歌誌「山百合」を創刊した。一方この山百合詩社

の同人は長尾桃郎が小樽で発刊した「エルム」を支援して、毎号寄稿した。妻の恒子も詩社の同人であったが、彼女はまた、同好の婦人たちを募り、バザーや講習会を開くなどの婦人活動を行い、夕咲はこれに、紫式部と清少納言に因んだ紫清婦人会の名を命名して後援した。また夕咲はこの頃から次第に、考古学や土俗学に関心を抱き始め、高山近郊での発掘調査に積極的に参加し、収集した石器や土器に関する研究報告をまとめた。大正八年には、飛騨における最初の野球チーム、アルプス野球団が結成されると、夕咲はその後援者となって、国歌を作詞した。さらに、山岳文化の提唱を目的として、飛騨山刀俱樂部を結成し、今日の飛騨山岳会の礎を築いた。九年二月には、その活動の一環として、一般の山岳愛好家に呼び掛け、位山雪中登山を行い、また同年四月には、同じ趣旨をもって「山郷新誌」を創刊した。片や、福田家の跡取りとして、親族の団結にも心を配り、大正九年一月、血縁の人々の親睦会ハートクラブを作った。今日もなお続いているこの会の歴史については、長瀬武宜、山下笛朗の手でまとめられた『はあとくらぶ抄史』（昭38・11）に詳しい。親族の中心的存在であった母象は、この会が結成されて間もない五月に、七十五歳でこの世を去った。

翌十年九月、若山牧水が信州での短歌会に向かう旅の途中、白骨温泉から平湯峠を越えて飛騨を訪れ、夕咲と旧交を温めた。牧水の「飛騨高山町・古川町」（『牧水全集4』昭4・9）には、古い友人を迎えた夕咲の熱狂的な歓待ぶりが描かれている。十二年三月には、大八賀村教育会の委嘱を受けて『池之端惣助翁伝』を執筆出版、十三年二月には、山百合詩社同人による詩誌「静なる饗宴」を創刊した。この年の十一月、病がちであった妻恒子が療養のため小坂温泉に逗留したのに同行して百首の歌を詠んだ。大正十四年には、朝鮮に慌ただしい旅